論説

元亀年間における大友氏の政治的・軍事的動向

～元亀三年伊予出兵の検討を中心として～

松原勝也

はじめに

天文十九年（一五五〇）の「二階崩れの変」に端を発した領国内部の軍事的混乱を収束させると、大友氏は北部九州への領土拡張を志向し、弘治～永禄初期には積極的かつ本格的な軍事的侵攻を開始する。その後永禄期を通じて、大友氏は当該地域で毛利氏やこれと連携した親毛利方勢力との間で激しい軍事的攻防を繰り広げていくが、こうした状況に重大な転換を迫ったのが永禄十二年（一五六九）末の毛利氏の九州撤退であった。これによって大友氏は残された親毛利方勢力を攻略すると共に、戸次鑑連ら有力重臣を配置することによって、北部九州支配体制を確立したと評価されてきたのである。[1] しかしながら、こうして北部九州の平定に成功し、戦国大名権力としての「全盛期」を迎えたとされる元亀～天正初期の政治的・軍事的動向については、主に通史等で概括的に触れられる現状に止まっており、十分な研究成果が蓄積されているとは言い難い。こうした基礎的諸問題の解明を積み重ねながら、大友氏にとって毛利氏撤退以後の政治的・軍事的課題とは何か、そしてそれにどう対応していたのかという問題が、幅広い視点から具体的かつ総体的に問われる必要があると言えよう。

こうした課題の一端を解明するため、元亀三年（一五七二）七月の大友氏による伊予出兵を取り上げたい。従来、この伊予

出兵は「元亀三年四月、西園寺公広が土佐の一条兼定に挑戦したので、大友宗麟は女婿の兼定を救援して、佐伯惟教（以下、人名略）らの大友氏の水軍の主力を伊予に派遣した[2]」とあるように、伊予西園寺氏が土佐一条氏を攻撃したことを契機とし、その救援を目的としたものであると捉えられている。こうした理解は地域史研究の場においても定着しており、まさに通説的理解であると言って過言ではない[3]。ところが、各氏の政治的関係や軍事的動向といった基礎的事項の多くが、軍記物を始めとする後世の編纂資料の記述に大きく影響を受けており[4]、正確な実態が捉えられていない可能性は十分推測できるのである。

また、出兵が短期間に終始していることから、豊予地域における散発的・局所的な軍事行動に過ぎないものと過小評価され、大友氏研究の中で慎重かつ適切な位置づけがなされてこなかった側面も否定できないであろう[5]。しかし、福川一徳氏が指摘したように、この伊予出兵は当該期における大友・毛利関係の推移と密接に関わっていたものとみられ[6]、その具体的様相を検討することが、親大友方勢力との連携の具体的様相や毛利氏動向への対応の在り方といった、対毛利氏戦争における大友氏動向の実態解明に大きく寄与すると考えられる。そして後述のように、それは大友氏の北部九州における支配動向とも関連を有しており、当該期における大友氏の政治的・軍事的動向総体からみても看過できない動向であることは間違いないものとみられる。

本稿では、信憑性の高い一次史料に基づきながら、伊予出兵の経緯や目的といった実像を慎重に検討し、その意味を当該期における大友氏の政治的・軍事的動向との関わりの中で捉えてみたい。

一　伊予出兵の背景

1　元亀三年初頭の豊予情勢

では、まず出兵が行われた元亀三年初頭の豊後・伊予情勢を示す以下の史料から、その背景について検討してみたい。

〈史料①〉

小見山水之平遠、敵取寄之段、預注進候、無心元存候、然者此方行可差急之通承候之条、前十五田原近江守(親賢)差立候、其外寄々之者共堅固申付候間、於赤間関表必近々可着陣候、警固船之事茂堅加下知候、可御心安候、爰元聊無緩之趣、島源兵衛尉令存知候、弥不可有油断候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

(元亀三年)
潤正月十九日　　(大友)宗麟（花押）

村上掃部(武吉)頭殿

（『先哲』四－一四五〇）[7]

＜史料②＞

就中国行、浦上遠江(宗景)守入魂之旨候之条、至所々警固船之儀申付候、折節従村上掃部頭所、申越子細候之条、船催之事可差急覚悟候、其国諸浦之事、臼杵新助被申合、堅固被申付事肝要候、将又麻生摂津(隆実)守現形之条、早々可討果之段申出候、氏(宗)貞(俊)被申談、不抜足様、才覚専一候、聊不可有御油断候、恐々謹言、

(元亀三年)
二月廿二日　　(大友)宗麟（花押）

戸次伯耆(鑑連)守殿

（『先哲』四－一四五二）

＜史料③＞

至備中表、吉川・小早川取出候之条、浦上宗景遂対陣、防戦半之段、注進及度々候、於能島表茂、芸州衆取向候之間、此節加勢無余儀候、如存知、近年驅催中国衆、両川令渡海候折節、宗景被頭貞心候、村上掃部頭事茂同前之条、彼両人江可加力依覚悟、於赤間関口急度一勢差出、一行為可申付、為先陣田原近江(親賢)守出張候、其国衆中之事、親賢被申合、乍御辛労別而可被励馳走事、可為祝着候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

(元亀三年)
三月六日　　(大友)宗麟（花押）

五条殿

（『先哲』四－一四五四）

まず史料①によれば、この時期伊予国越智郡能島を拠点とする海賊衆村上武吉が「敵」に攻撃を受けており、「此方行可差

急」と大友氏に早急な支援対策の実施を要請していることが窺える。能島村上氏は永禄末年に毛利氏から離反しており、そのため元亀二年（一五七一）三月には毛利勢が能島村上氏の枝城務司を攻撃し、同年七月には小早川隆景や来島村上氏らによる攻撃が確認できるなど、この時期毛利方勢力から断続的に攻撃を受けていた。[8] 史料③に「於能島表茂、芸州衆取向候」とあることからも、元亀三年初頭、能島村上氏に対して軍事的圧力を加えていた「敵」とは、毛利氏もしくは毛利氏に与する勢力であるとみて間違いないと思われる。

こうした情勢下で、史料①によれば、大友氏は能島村上氏に対する二点の支援方針を打ち出しているが、まず第一に示されたのが重臣田原親賢の長門国赤間関への軍事進攻であった。親賢は閏正月十五日に赤間関表に向けて出陣したとされ、その後三月には「於赤間関口急度一勢差出、一行為可申付、為先陣田原近江守（親賢）出張候、其国衆中之事、親賢被申合、乍御辛労別而可被励馳走事、可為祝着候」（史料③）と、大友氏は五条氏ら筑後国衆に対して赤間関表への出陣と、先発していた田原親賢との軍事的共同行動を求めている。この時の田原及び筑後国衆による具体的な戦闘行動は明らかではないが、能島村上氏支援を目的とした大友氏の赤間関表での軍事活動には、当初からこの両者が主体的役割を担う存在として期待されていたものと想定できよう。

次に「警固船之事」についてである。史料②によれば、能島村上氏から支援要請を受けた大友氏は、当時筑前国支配に重要な役割を担っていた戸次鑑連・臼杵新助に対して早急な「船催」の必要性を伝え、筑前国内諸浦に対する徴発を両者に命じている。こうして動員された筑前国内の水軍力が、大友氏による能島村上氏支援活動の中でどのような役割を担っていたかを具体的に示す史料は確認できないが、地理的関係からみても、前述した田原や筑後国衆による赤間関表での軍事行動と密接不可分であった可能性は非常に高い。また前年の元亀二年七月には、「能島要害為合力、阿州衆岡田権左衛門・塩飽者共、以船手水兵粮差篭候処、沼田警固并来島・因島衆懸合」[9]と、阿波・讃岐衆が能島村上氏に対する物資救援を行い警戒中であった毛利方水軍と交戦している。大友氏が期待する「船催」には、こうした能島村上氏に対する直接的な物資支援や、それを阻止し

ようとする毛利方水軍との戦闘行為も内包していたと推測できよう。一方で、能島村上氏の活動範囲は筑前にも及んでおり、同氏が北部九州方面からも兵粮・物資の補給・調達を行っていた可能性は十分想定できる。同氏自ら確保していたであろう補給ルートを支援・警備する意味からも、大友氏には適切かつ迅速な対策が求められていたものとみられる。

こうして大友氏は毛利氏の軍事的圧迫を受けていた能島村上氏の支援に取り組んでいくことになるが、史料②及び③からも窺えるように、その支援対象には備中浦上氏も含まれていた。「至備中表、吉川・小早川取出候之条、浦上宗景遂対陣、防戦半之段、注進及度々候」（史料③）とあるように、この時期、能島村上氏同様に浦上氏も毛利氏の軍事的圧迫を受けており、再三にわたって大友氏側に戦況を通報するなど緊密な連携を取っている。能島村上氏に対する支援策として打ち出された赤間関出兵と警固船徴発についても、史料②に「就中国行、浦上遠江（宗景）守入魂之旨候之条、至所々警固船之儀申付候」、史料③に「彼両人江可加力依覚悟、於赤間関口急度一勢差出」とあるように、それには浦上氏を支援する意味も含まれていたのである。

ではこの時期、大友氏が「彼両所江御加勢無余儀」（『先哲』四－一四五五）と、能島村上・浦上両氏に対する支援の必要性を強く認識とするに至った背景にあるものは何なのか。それを当該期における両氏の動向や大友氏との関係からみておきたい。

2　能島村上・浦上両氏支援の理由

〈史料④〉

追而

旧冬進飛脚候之処、御懇意之次第祝着候、先書如申候、今度小早川・吉川以渡海、豊前・筑前競望之企、不及言語之間、宗麟至此表令出張、不抜足様可討果才覚議定之条、可御心安候、然者其表以手切、於被顕心底候、向後永々不可有別儀可申談候、然処毛利当方和睦之批判有之之由承候、誠驚存候、近年元就（元利）表裏之覚悟、遺恨深重之条、既発足候之上者、和談之儀、日本国中大小神祇殊八幡天神茂照覧、尽未来際可為議絶候、無疑心、早々可被顕貞心事、頼存候、殊輝弘（大内）申談上者、

爭可有別心候、中国籌策之様躰、是又過半相調分候、銘々従弘可有御入魂之条、不及口能候、両家申合元就閉目之儀者、何様不可有余儀候、委細用口上候、恐々謹言、

（永禄十二年）
三月十六日　　宗麟（大友）（花押）

浦上遠江守（宗景）殿

（『先哲』四－一一二四）

＜史料⑤＞

前日、以戸次□□・□田□喜如申候、吉川・小早川引率中国衆、立花表渡海之砌、浦上宗景申合、前後之調略依無油断、敵悉没落候、併両川事、就討漏候、今又備中堺目江取出、防戦半之段到来候、則可加勢之処、遼遠故不任所存之条、至赤間関口、一行無余儀存候、今年各在陣、苦労雖無尽期候、宗景・同村上掃部頭及難儀之由申来候条、此節不顕心底候者、後略之覚、外聞不可然候間、乍御苦労、此節可被励馳走事肝要候、就中上口之儀、両川如存分之於券立者、向後北方気仕不可有止事候之条、急度一勢差出、自他申談候者、可明永々之隙候、能々有思惟、別而可被添心事可為祝着候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

（元亀二年）
十二月廿八日　　宗麟（大友）在判

志賀兵庫頭（鎮隆）殿

（『先哲』四－一四四六）

史料④によれば、北部九州において大友・毛利両氏が激しい軍事的対立を繰り広げていた永禄十二年（一五六九）三月、宗麟は浦上宗景に対し、毛利勢の九州渡海という事態に際して自身の出張を伝えた上で、当時巷間に流布していた大友・毛利間和睦の噂を明確に否定し、毛利氏との早々の手切を求めている。一方で、この時期大友氏は尼子氏旧臣層とも交渉しており、「勝久御一家再興此節候之間、各別而有馳走、被遂本意肝要候」[11]と、勝久擁立による尼子氏再興を強く促していた。こうした中国方面の反毛利方勢力に対する働きかけからは、毛利氏の背後を動揺させることで戦況を優位に進めたい大友氏側の強い意向が看取できよう。そして、その後十月に大友氏の下へと到来した浦上氏の使者は、「上口之事、尼子勝久衆・宗景申談之、

無残所属案中、宇喜田和泉守改先非、懇望依不浅令赦免、聊無気遣、彼境毎事任存分之由候[12]」と述べたとされ、浦上氏が尼子氏と緊密に連携を図りながら、備作方面で親毛利方勢力の攻略にあたっていたことが窺える。大友氏の浦上氏への働きかけはこうした形で結実しており、期待通りの結果をもたらすこととなったのである。

また史料④の最後部では「殊輝弘申談上者、爭可有別心候、中国籌策之様躰、是又過半相調分候」とあり、当時大友氏の下に寄宿中であった大内輝弘との関係や、中国方面に対する計略の進捗状況についても浦上氏側に伝えられている。この七ヶ月後の永禄十二年十月、輝弘は大友氏の支援を受けて周防山口へと進撃し、毛利氏が九州から撤退する重要な契機となるが、既に五月の時点で、輝弘は大友氏の要請に基づいて周防渡海を行う意志を明らかにしていた[13]。同じ頃、大友氏が尼子氏旧臣に対して「至防長一行之儀、預入魂候、得其意候[14]」と述べていることも踏まえるなら、浦上氏側に伝えられた「中国籌策之様躰」には、輝弘の防長侵攻に関する内容も含まれていたと想定するのが妥当であろう。激化する対毛利氏戦争を打開する方策として、大友氏権力内部では当初から輝弘の周防渡海を企図しており、その準備段階においては、浦上氏や尼子氏といった中国地方における反毛利方勢力との綿密な連携が重要な意味を有していたのである。そして、こうした浦上氏との連携は「吉川・小

図1　伊予出兵関係地図

早川引率中国衆、立花表渡海之砌、浦上宗景申合、前後之調略依無油断、敵悉没落候」（史料⑤）とあるように、北部九州からの毛利氏撤退にも大きく貢献したと大友氏側が認識する程のものであった。大友氏が対毛利氏戦争を優位に進める上で、浦上氏は極めて重要な役割を担っていたものと認識しておく必要があろう。

一方、能島村上氏について、『陰徳太平記』によれば永禄十一年（一五六八）十月頃より周防上関に在城し、周防灘を警固していた村上武吉は、翌年毛利氏の九州出陣に際し、病気と称して戦線を離れて上関に引き籠もったとあり、これによって打撃を受けた来島村上氏や小早川隆景との関係が悪化したとされている。[15] 同書はこの時期能島村上氏が毛利氏から離反し、大友氏へと結びつく経緯を示すものとしてしばしば引用されるが、後世の軍記物という史料的性格、そして永禄十二年六月に能島村上氏が豊前表で大友氏方の船舶を攻撃しているとされることから、その事実関係については慎重に見極める必要が指摘されている。[16] そうした中で、金谷匡人氏が輝弘の周防渡海と関連させた上で、能島村上氏が周防灘を警固していたにも関わらず、それが実現したのは「これ以前に村上武吉が毛利氏の陣営から離れたことによる結果」としているのは説得的である。[17] つまり能島村上氏が大友氏と交戦した永禄十二年六月からさほど経たないうちに両者間で何らかのコンタクトがあり、それが『陰徳太平記』に窺えるような能島村上氏の戦線離脱、そして輝弘の周防渡海へと展開していったものと考えられるのである。先に述べたように、輝弘の周防渡海は対毛利氏戦争が激化する中、大友氏が中国方面の反毛利方勢力と連携を取り合いながら綿密に企図していたものであり、戦況を優位に展開する上で非常に重要な効果をもたらしていた。それを実現させるためには、周防灘を警固していた能島村上氏の取り込みが絶対不可欠な条件だったのであり、この時期大友氏が浦上氏や尼子氏同様に、同氏に対して緊密な連携を強く働きかけていたことは間違いなかろう。

以上、永禄末年の北部九州における大友・毛利戦争において、大友氏は能島村上・浦上両氏と綿密な連携を取り合っており、両氏の動向は毛利氏の北部九州からの撤退にも大きく関わっていた。大友氏が元亀三年の時点で、毛利氏の軍事的圧迫を受ける両氏の支援に取り組む必要性を強く認識していたのは、こうした大友氏に対する多大な貢献が背景にあったことを踏まえて

おくべきであろう。大友氏にとって両氏を支援することは、「宗景・同村上掃部頭及難儀之由、申来候条、此節不顕心底候者、後略之覚、外聞不可然候」（史料⑤）とあるように、対毛利氏戦争を優位に展開したいという軍事戦略上は勿論、上級権力者たりうる政治的地位や権威、それに基づく巷間の評判を維持するという側面からも強く求められていたのである。そして、こうした経緯は史料③に確認されるように、大友氏が筑後国衆に赤間関表への出陣を命じた際にも伝えられていた。そこには「如存知」とあるように、当該期における能島村上・浦上両氏の動向や大友氏との緊密な関係というものは、筑後国衆も十分承知する程の事実であり、大友氏がこれらを両氏支援の名目で軍事徴発する上での論拠となりうるものだったことが窺えるのである。

しかしながら、能島村上・浦上両氏に対する支援活動を含む大友氏の毛利氏対策は、後述のように容易には進まなかった。そしてその延長線上に伊予出兵は浮上し、実行に移されていくのである。

二　伊予出兵の実像

1　出兵直前の中国情勢

〈史料⑥〉

三月十一日之貴札到着、令拝見候、如仰近年宗景（浦上）別而申談候、然処、芸州不慮之存分共候而、及鉾楯候、其表堅固之御覚悟之故、備作無異儀之由候、本望候、此口之儀も随分相支候、乍恐可御心安候、就中亀井鹿介（山中）方、頃但州御在身之由候、専要ニ存候、豊州御行御延緩故、諸国之行不相応候、雖然、旁御覚悟無二之首尾候者、各可為勝利事、覚前之儀候、仍硯一面送給候、遼遠之御懇志云、爰元之珍器云、自愛不一候、猶期万吉令省略候、恐々謹言、

卯月八日（元亀二年）　武吉（村上）（花押）

牧兵庫助殿（尚春）　御返報

（「牧」二七）[18]

史料⑥は元亀三年（一五七二）春、能島村上氏と美作国衆三浦氏の重臣牧氏との間で情報交換が行われたことを示す史料である。これによれば「如仰近年宗景別而申談候」と、この時期能島村上・浦上間で緊密な連携が行われていたことが明示されており、牧氏からは備作情勢と共に、当時山陰で反毛利活動を行っていた尼子氏旧臣山中鹿介の動向が伝えられていることが窺える。その中で特に注目したいのは、武吉が「豊州御行御延緩故、諸国之行不相応候」と述べている部分である。冒頭の「三月十一日之貴札」を指すとみられる牧尚春書状[19]に「此節自豊州至防長御進発候者、以其響雲伯之儀、可及道候分ニ候」とあることから判断すれば、この「豊州御行」とは赤間関への軍勢派遣を中核とした大友氏による毛利氏対策を意味するものと考えられよう。毛利氏の軍事的脅威に晒されている親大友方勢力は、毛利氏への軍事攻撃という大友氏側の積極的な対応と、それに伴う当該地域情勢の好転に強い期待を抱いていたのである。先にみたように、大友氏側としてもこれらを支援する必要性や、その意義の重要性は十二分に認識していたはずであった。しかしながら大友氏による毛利氏対策は遅延しており、中四国の親大友方勢力も適切な対応が取れずにいるとの状況認識を武吉が示しているのである。

以上を踏まえれば、能島村上・浦上両氏支援の中核ともいえる大友氏の赤間関への軍勢派遣は、元亀三年初頭にその実施が表明されたにもかかわらず、四月初旬の時点においても実現していなかったと考えられる。とすれば、先に述べた閏正月十五日時点における田原親賢の赤間関出陣も実現しなかったか、もしくは出陣していたとしてもさしたる軍事的成果を挙げ得なかったものと想定できよう。そのために能島村上氏を取りまく状況も停滞を余儀なくされ、「此口之儀も随分相支候」とあるように、引き続いて毛利方勢力による軍事的圧迫を受け続けることになったのである。[20]それは浦上氏も同様であり、これら親大友方勢力が大友氏の積極的対応に大きな期待をかける状況、そして大友氏がこれらを支援する必要性は依然として継続していたものと想定できよう。

そうした中、中国情勢は極めて重要な局面を迎えていたのである。

〈史料⑦〉

就其表立柄之儀、示預候之趣、各申談令披露候、爰元於行者、堅被申付、赤間関口并与州目茂兵船渡海之儀、急速被申催候之条、其境之儀、浦上宗景被仰合、火急御調略肝要候、委細直被申候之条、不覃口能候、仍硯一面得御意候、御丁寧之至畏存候、猶重々可申承候之間、閣筆候、恐々謹言、

（元亀三年）
六月十六日　　（志賀）親度（花押）

（尚春）
牧兵庫助殿　御報

（「牧」四九）

「石見牧家文書」によれば、元亀三年（一五七二）六月、大友・牧間で頻繁な連絡交渉があったことが確認できるが[21]、それは史料⑦冒頭に「就其表立柄之儀、示預候」とあるように、牧氏から通報された中国情勢の重大な変化が契機となっていた。

元亀三年閏正月、毛利氏は備後国衆楢崎氏に対して「当春動之事、催無油断候[22]」と述べており、元亀三年初頭時点で山陽方面での軍事攻撃を計画していたことが確認できる。そして六月には「只今之儀者、備中表就出張之儀、御行之相談半之事候[23]」とあり、この時期浦上氏らに対する軍事攻撃の準備は着々と進められつつあった。しかも毛利氏は前年の八月、再興を目指す尼子勝久の軍事攻略に成功しており、山陽方面に存在する親大友方勢力の軍事掃討に専念できる体制にあったのである。これに対して大友氏は「其境之儀、浦上宗景被仰合、火急御調略肝要候」（史料⑦）と、浦上氏と連携した上での早急な調略を牧氏に求めている。迫り来る毛利氏の軍事攻撃は、中四国の親大友方勢力にとって極めて深刻な事態の招来を意味しており、大友氏に対して早急な支援対策を強く期待していたものと推測できよう。

そのような状況下で、大友氏内部では「赤間関口并至予州目茂兵船渡海之儀、急速被申催候」と、以前より表明していた赤間関表への軍事攻撃に加えて、伊予方面に対する軍事行動が急遽浮上しているのである。こうした大友氏の方針決定に、この時期の山陽方面における情勢緊迫化が関連していなかったとは考え難い。従来、大友氏の伊予出兵は伊予西園寺氏による土佐一条氏攻撃を契機とし、縁戚一条氏の救援を目的としたものと理解されてきたが、一連の大友・牧間交渉の過程、そして「石見牧家文書」以外の当該期一次史料からは、そうした動向を窺わせる記述は一切確認できない。これらから判断すれば、後世

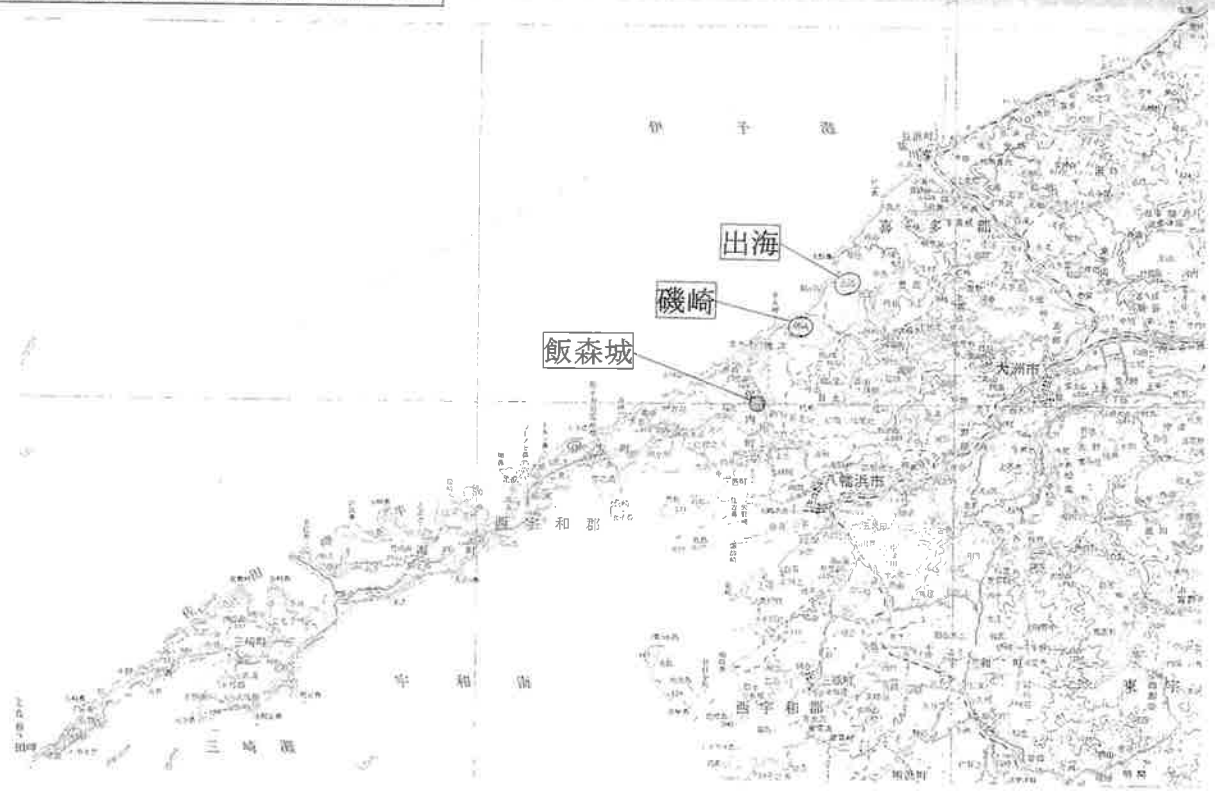
の諸記録に強い影響を受けていた従来の通説的理解のみに依拠して、大友氏の伊予出兵を理解する必然性は低いと言わざるを得ないのである。また、これまで繰り返し述べてきたように、赤間関表への軍事行動は当該期の大友氏による毛利氏対策の中核的方針であった。伊予への軍事行動がこれと併記され、その上で毛利氏との交戦が迫りつつあった牧氏に伝えられたという経緯を勘案しても、やはり伊予出兵は毛利氏の山陽方面における動向と密接に関係しており、同地域の親大友方勢力を支援する目的を有していたと捉えるのが妥当であると考えられるのである。

2　飯森攻撃の実像と同所の地域的様相

以上のような背景と目的をもって大友氏は伊予出兵を実行に移していくが、実際に伊予へと渡海したことが確認できるのは、佐伯惟教や鶴原宗叱、若林鎮興や薬師寺氏などである（『先哲』四－一四七三～八〇、八二）。これらはいずれも海部郡沿岸に基盤を有しており、自前の水軍力を保持していた。[24]「殊与州表ニ兵船数百□(殿)被差渡候」（「牧」四八）ともあるように、こうしたいわゆる海部水軍が伊予派遣軍の主力を構成していたものとみられる。その中でも「今度其表於所々軍労之次第、従佐伯惟教到来」（『先哲』四－一四七七など）と、佐伯惟教が若林・薬師寺らの軍功注進を行っているという事実からは、当時加判衆であった惟教が伊予派遣軍の軍事指揮権を保持していたことを窺わせよう。この佐伯惟教は既に指摘されるように、弘治二年（一五五六）に勃発した小原鑑元の乱に関連して伊予へと逃れ、その後永禄末年に赦免され帰国するまでの間、西園寺氏の庇護を受けたとされている。[25]伊予方面の情勢や地理的位置関係に通じた佐伯氏の起用は、大友氏が最善かつ適切な人員配置と戦略をもって当該地域の攻略に臨んでいた可能性を示唆していよう。

また、『大友家文書録』綱文や『大友興廃記』などによれば、大友氏は元亀三年（一五七二）四月段階から伊予での軍事活動を行っており、現存する一次史料から明確に確認できる七月十九日の飯森城攻撃は、西園寺氏攻略後の残党勢力掃討という意味合いが濃いものとして描かれている。しかし、先にみたように、大友氏の伊予出兵は元亀三年六月の段階で浮上したもの

図 2　飯森周辺地図
(国土地理院発行20万分の 1 地図「松山」より)



であり、こうした位置づけが正確な事実を反映していない可能性は極めて高い。実際、六月二十七日の時点においても「既兵船出津之催、一両日議定候」（「牧」三九）とあり、佐伯惟教ら大友勢の伊予渡海は依然として実現していないことが窺えるのである。大友勢の伊予渡海は早くても七月初旬であるとみられ、飯森城への攻撃は渡海して早々の軍事活動であると捉えるのが妥当であろう。

この飯森城攻撃を示す一次史料から大友氏の交戦相手を特定することはできないが、少なくとも大友氏と敵対している以上、この時期毛利氏と関係の深い勢力であったことだけは間違いない。これを前提とした上で、この時期飯森を確保していた勢力や当該地域一帯の地域的様相について、できうる限りの検討を加えてみたい。

戦国期において同所は、大洲に本拠を有する宇都宮氏庶流の萩森宇都宮氏の勢力域であるとされているが[26]、その宇都宮氏は永禄十一年（一五六八）、毛利氏の軍事的支援を受けた河野氏によって攻略されている。これに伴って、毛利氏の政治的・軍事的実力を背景とした河野氏の影響力が、次第に当該地域周辺にも浸透していたことがまずは推測できよう。その河野氏も元亀年間に入ると当主権力が弱体化しており、権力内部には大友・毛利双方と連携した勢力が存在するなど、微妙な政治的スタンスが窺える[27]。その中でも特に毛利氏との関係が深かったとされるのは来島村上氏であるが、以上の状況を踏まえれば、同氏かこれに近しい河野氏内部の親毛利方勢力が、この時期飯森を確保していた可能性は十分想定できよう。また『大友興廃記』には「飯森の城にハいつミ・いさきと云所の侍籠り」とあり、飯森近辺に拠点を有する出海・磯崎衆が飯森城に篭城し、大友氏と交戦したとされている。両所はいずれも伊予灘沿岸部に位置しており、これらは何らかの形で当該地域水運との関わりを保持しうる存在であったものとみて、まず間違いなかろう。具体的な事実関係は不明ながらも、飯森城が伊予灘で活動する海上勢力と深い関係を有しており、有事の際にはこうした周辺在地勢力の詰めの城として機能していたとしても何ら不思議ではない。とすれば、これらが同様の性格を有していた上級権力河野氏や来島村上氏と結び付きを有し、その勢力下にあった可能性は高い。

さらにこの出海・磯崎両所の地域的様相についてみてみると、天正四年（一五七六）に伊勢参宮を行った西園寺宣久は、その帰路瀬戸内海を下って出海に着船しており、その後陸路で本拠黒瀬に向かっている。また当該地域一帯を含む矢野保に権益を有していた室町幕府幕臣摂津氏は、戦国期に入ると八幡浜へと下向するが、その際磯崎浦に着船したとされており、「磯崎浦が矢野保の外港として機能していた可能性」が指摘されている。[29] このように両所は瀬戸内海水運と深く関わっており、伊予灘に面した当該地域一帯の中で重要な交通拠点の一つであった。逆に八幡浜・宇和方面からみれば、豊予海峡という航海上の難所の存在によって、両所はまさに瀬戸内海への「玄関」として極めて重要な役割を担っていた地域だったと考えられるのである。

先に明らかにしたように、毛利氏の出兵に伴って備作方面の軍事的緊張が高まりつつある中、大友氏は毛利氏と敵対する中四国の親大友方勢力を支援する必要性に迫られていたが、大友氏自身が「則可加勢之処、遼遠故不任所存」（史料⑤）と述べているように、遠く離れたこれらに対して直接的な軍事支援を行うことは困難であった。そのような状況下において、大友氏には親大友方勢力を取りまく軍事的緊張状態を緩和するために、たとえ一時的であったとしても毛利氏が当該方面に対する軍事行動を中断し、大友氏の動向を注視せざるを得ない程の軍事的インパクトを与えることが求められていたものと想定できよう。その大友氏が実際に攻撃を加えた場所が飯森だったということは、伊予出兵の意味を理解する上で看過できない重要な意味を有していると考えられる。飯森周辺地域一帯は伊予灘における海上通行と深い関係を有しており、瀬戸内海と南予とを結ぶ重要な交通上の結節点であった。大友氏が出兵にあたって当該地域を攻略目標に定めた理由が、こうした地域的様相と全く無関係であるとは考え難い。大友氏にとって飯森周辺地域一帯を軍事攻略することは、豊後水道のみならず伊予灘の制海権をも握る上での橋頭堡を確保し、瀬戸内海西部海域における軍事的プレゼンスの強化につながる可能性を十二分に有していたものと考えられよう。

また、西園寺氏はこの時期毛利氏と近しい関係にあるが、[30] 両者間や来島村上氏など親毛利方勢力との連携を遮断する意味か

らも、当該地域はまさに最適かつ効果的な場所だったと思われる。周辺の在地勢力が最終攻防拠点として篭城したとされることからも窺えるように、飯森城はまさに当該地域のランドマーク的存在であり、大友氏にとって当該地域の安定的掌握を図る上からも、その攻略と接収は避けて通れない重要課題であったものと捉えられよう。

三　元亀年間の大友氏動向と伊予出兵

1　北部九州情勢との関連

先に挙げた史料⑥において、村上武吉は「豊後御行御延緩」と、元亀三年（一五七二）四月時点で大友氏の政治的・軍事的動向が遅延していると述べていた。大友氏にとっては中四国の親大友方勢力に対する速やかな支援が要請されている状況下で、こうした事態に至っている理由とは何なのか。それを当該期の大友氏を取りまく政治的・軍事的状況との関連から検討してみたい。

永禄十二年（一五六九）末に毛利氏が北部九州より撤退した後、大友氏は高橋鑑種を始めとする当該地域の毛利方勢力を攻略すると共に、立花城や宝満・岩屋両城といった重要拠点を接収し、新たに戸次鑑連や高橋鎮種らを配するなどして支配体制の再編成を行っていく。[31] そして元亀元年（一五七〇）三月に豊前・筑前両国の掌握を表明すると、大友氏はすぐさま肥前龍造寺氏の軍事攻略に着手するが、これには当主宗麟自ら出陣しており、この時期大友氏が以前から反大友的姿勢を繰り返していた龍造寺氏の存在を深刻な桎梏と捉え、その軍事討滅を強く意図していたことを窺わせよう。その後両勢力は筑後・肥前国境周辺で激しい軍事衝突を繰り広げていくが、同年八月の今山合戦で大友氏は敗北を喫し、[32] それを契機に事態は両氏間での和睦成立へと推移していった。この和睦によって、当該地域は一時的な情勢安定化を遂げることとなったが、大友氏側からみれば龍造寺氏を軍事討滅する絶好の機会を逸し、大きな懸案材料を残す結果となったのである。このように毛利氏の撤退後、大友

氏は軍事行動などを通じて北部九州情勢の安定化に尽力しており、大友氏にとって当該地域支配の安定・強化は緊要な課題であったと捉えられよう。

その一方で、九州から撤退した毛利氏は山陰方面へと転進しており、出雲国内で反毛利氏活動を展開していた尼子勝久に対する攻撃を行っている。そして元亀二年（一五七一）八月には勝久の軍事攻略に成功し、毛利氏は残る山陽方面における反毛利方勢力の掃討へと軍事方針をシフトし始めていた。こうした状況下で、大友氏は「就中上口之儀、両川如存分之於券立者、向後北方気仕不可有止事候」（史料⑤）という認識を示している。若干文意の取りづらい文言があるが、意訳すれば「上口（＝備作方面）の政治的・軍事的情勢が両川（＝吉川・小早川）の思い通りの展開となってしまっては、今後北方（＝毛利氏）の軍事的脅威は止まることがない」ということになろうか。つまり毛利氏が尼子氏に続いて浦上氏などをも攻略するような事態になれば、再び北部九州をめぐって毛利氏と激しい軍事抗争が行われる可能性は高いと、大友氏側が危惧していたことが窺えるのである。毛利氏による北部九州への再侵攻について、大友氏内部では毛利氏が撤退した時点より懸念されていたものと推測できるが、重要懸案であった北部九州支配体制の再構築に専念する状況を確保するためにも、それはできうる限り回避する必要があったものと考えられる。であるからこそ、この時期大友氏は毛利氏動向に細心の注意を払うと共に、中四国の親大友方勢力と緊密な連携を取り合い、これらの反毛利活動を側面から支援する必要があったのである。

しかしながら、このような大友氏による毛利氏対策は順調に進まなかった。能島村上・浦上両氏を支援するため、大友氏が戸次鑑連に対して筑前国内の水軍力徴発を命じていた史料②には、「麻生摂津守（隆実）現形之条、早々可討果之段申出候」とあり、元亀三年二月頃、同国遠賀郡花尾城を拠点とする麻生氏が大友氏から離反したことが示されている。この麻生氏の離反に対し、大友氏は鑑連にその攻略を命じているが、「就今度麻生摂津守誅伐之儀、田原近江守以同陣、従最前別而馳走」（『先哲』一四六一）とあるように、田原親賢が佐田・成恒ら宇佐郡衆を率いて麻生氏攻略に参陣し、多大な軍事的貢献を行っていることが確認できる。先に述べたように、親賢は元亀三年閏正月に赤間関表へ出陣したとされていたが、にもかかわらずその軍事行動

の形跡が史料上窺えなかったのは、このように親賢自身が麻生氏攻略に深く関与していたためであった。大友氏の赤間関出兵が実行に移されていく最中に起きた麻生氏の離反には、これを阻止しようとする毛利氏側の策動があった可能性を想定せざるを得ないが、その具体的様相や大友・麻生両勢力による交戦の様子などについては明らかでない。しかし三月初旬になると、史料③にあるように親賢は再び赤間関表での軍事行動に従事しようとしており、麻生氏は遅くともこの時点までには親賢ら大友方勢力によって軍事攻略され、混乱は鎮静化したものと考えられよう。

こうして大友氏による赤間関表への軍事行動は、麻生氏の離反とその攻略によって一旦は中座を余儀なくされるが、再びそれが実現に向けて動き出していく中、今度は肥前情勢が大きく揺れ動き始めていくのである。

〈史料⑧〉

為龍造寺隆信、当要害近辺迄相動候処、稠被遂防戦、当城無別儀之由、言上之趣、則令披露候、堅固之覚悟肝要之通、被成　御書候、然者筑後・筑前衆堺目迄差寄、無事之助言専要之段、被　仰出候、自然隆信強而一雅意之子細候者、重々依注進、可被成其　御心得候、為御存知候、恐々謹言、

（元亀三年）卯月二日　　（白杵）鑑速（花押）
（志賀）親度（花押）
（吉岡）宗歓（花押）

横岳弥十郎（鎮貞）殿

（『先哲』四―一四六四）

史料⑧などによれば、元亀三年（一五七二）三月末、龍造寺隆信は隣接する肥前国東部の三根郡へと侵攻し、横岳氏の居城西島を攻撃するなど、この時期龍造寺・横岳間の軍事的対立が激化し始めていたことが確認できる。[39] 大友氏はその横岳氏から「稠被遂防戦、当城無別儀之由」との通報を受けているが、ここでまず大友・横岳関係についてみておくと、天文末年以降両諸の関係が次第に深化しており、永禄末年から天正初期にかけての大友・龍造寺戦争においても、横岳氏は基本的に大友氏方

として活動していることが窺える。[34] その横岳氏本拠西島は肥前・筑後国境を流れる筑後川に面しており、度々大友氏の本陣が置かれた高良山と龍造寺氏本拠水ヶ江とを結ぶ直線上に位置している。地理的に見ても、肥前国進出を目指す大友氏にとって、横岳氏は極めて重要な橋頭堡的存在であったことが指摘できよう。天正二年（一五七四）、大友・龍造寺間の軍事的緊張がピークを迎える中、大友氏が筑後国衆に西島城への在番を命じ、並行して手火矢や塩硝、兵粮などといった戦闘物資の補給を頻繁に行っている事実は、この時期大友氏にとって横岳氏の安定的確保が如何に重要な意義を有していたかを端的に明示している。

こうした重要な存在であった横岳氏が、しかもその居城が攻撃されるという極めて深刻な事態において、大友氏には横岳氏に対する早急かつ強力な支援が求められていたものと想定できよう。同じく史料⑧によれば、大友氏は筑前・筑後国衆に対して肥前国境近辺まで出動すると共に、「無事之助言専要」と紛争解決に向けた調停に尽力するよう命じている。史料③にあるように、大友氏は三月初旬、筑後国衆に対して赤間関表での軍事行動に従事するよう命じていたが、龍造寺氏の横岳氏攻撃という事態に伴って、それは横岳氏支援へと大きく転換したことが確認できるのである。

また、麻生氏攻略後に再び企図された赤間関表での軍事行動に関して、軍事指揮権を保持するなど総責任者的立場にあったとみられる田原親賢は、史料③と同日の元亀三年三月六日大友家加判衆連署状（『先哲』四―一四五五）に署名して以降、一時的に連署メンバーから外れている。麻生氏攻略を終えて豊後府内へと帰還した親賢は、再び赤間関出兵を命じられると府内を離れて居城の豊前妙見岳城に滞在し、軍事的共同行動を行う予定にあった筑後国衆との連絡調整も進めながら、出兵準備に専念していたものと推測できよう。この最中に龍造寺・横岳紛争は勃発したのであり、筑後国衆に対する方針転換が親賢の動向にも大きな影響を及ぼした可能性は極めて高い。それを窺わせるように、親賢の赤間関出兵は閏正月時点と同様、この時期実現した形跡が確認できないのである。[35] 龍造寺氏の動向が、大友氏による毛利氏対策の遂行を大きく阻害していたことは間違いないと言えよう。

このように、麻生氏の離反や龍造寺・横岳紛争といった北部九州での相次ぐ情勢変化こそが、村上武吉が「豊後御行御延緩」

と述べたような、大友氏による毛利氏対策の遅延を招いた要因だったとみられる。中四国の親大友方勢力に対する連携や支援を中核とした大友氏の毛利氏対策、そしてそれが具現化した伊予出兵の意味を捉える上では、こうした北部九州情勢の推移に対応する大友氏の姿を十分関連づける必要があることを、この「豊後御行御延緩」という文言は示唆していよう。そしてそのことは一方で、毛利氏が北部九州から撤退して以降、大友氏にとって最も重要かつ優先的な政治的・軍事的課題というものが、北部九州支配体制の早急な整備・再構築であったことも窺わせる。特に龍造寺氏の存在は大友氏にとって深刻な懸念材料であったが、その龍造寺氏による横岳氏攻撃は、今山合戦後の和睦によってもたらされた大友・龍造寺関係の一時的安定を崩壊させるに十分な影響力を有していた。北部九州において看過しがたい重要課題が再燃したことによって、大友氏は早急に当該地域の政治的安定化に取り組まざるを得ない状況にあったと考えられるのである。しかし前章で述べたように、毛利氏の備中攻撃が目前に迫ったことによって、山陽情勢も一気に軍事的緊張を高めつつあった。大友氏はこの時期、北部九州における重要懸案である龍造寺氏対策を抱えながら、中四国の親大友方勢力に対する支援も要請されるという極めて難しい立場に追い込まれていたのである。

以上のような背景や飯森周辺地域一帯の地域的特質を踏まえるなら、伊予出兵が散発的かつ局所的な軍事行動であり、単なる毛利氏の後方撹乱に過ぎないものと過小評価することは妥当ではない。厳しい状況判断が迫られる中、可能な限り最大限の軍事的インパクトを毛利氏に与えながら、危機的状況を迎えつつある浦上氏ら親大友方勢力を支援することが大友氏には求められていたはずである。そのような大友氏が現状で行いうる最善かつ効果的な対策を模索した結果が伊予出兵だった。出兵当初から大友氏は、飯森周辺地域一帯の攻略に伴う軍事的効果の波及に多大な期待を寄せていたものと考えられよう。

2　出兵後の中四国情勢

最後に、以上のような背景に基づいて実行に移された大友氏の伊予出兵が、その後どのような経過を辿ったのかについて触

れておきたい。

伊予へと渡海した佐伯惟教ら大友勢による軍事行動は、現存する一次史料からは元亀三年七月しか確認できず、飯森城攻略及び接収に成功したことを明確に示す形跡もみられない。そのことは大友氏の伊予出兵と密接な関連を有していた毛利氏動向の推移からも窺うことができる。飯森城攻撃から九日経った七月二十八日、小早川隆景は「此表之儀、至備前一行申談候、輝元事、去廿六日至中途御出張候」[36]と、当主輝元自ら備作方面に向けて出陣したと述べている。大友氏による伊予出兵が実現したにもかかわらず、毛利氏は当初の予定通り山陽方面における軍事行動を開始しているのである。こうした状況証拠から判断すれば、伊予出兵に伴う飯森攻略、そして大友氏による当該地域一帯の掌握は実現し得なかったものと判断できよう。

一方、軍事的緊張が最高潮に達した毛利・浦上関係だが、毛利氏の軍事侵攻が間近に迫る中、十月になると将軍足利義昭の斡旋によって両氏間での和睦が合意されるに至っている。吉川元春・小早川隆景両者が「今度芸備和平之儀、雖非本意候、京都御下知之条、不能違背、応上意候」[37]と述べているように、当該地域の親大友方勢力に対する本格的な軍事討滅を目論んでいた毛利氏にとって、浦上氏との和睦締結は不本意以外の何物でもなかったとみられる。こうした義昭による毛利・浦上間の和睦斡旋の動きは既に元亀三年初頭には確認できるが[38]、同年六月に浦上氏は義昭に対して「備芸和睦」実現に向けた要請を行っており[39]、これを受けて義昭は斡旋活動を活発化させていた。毛利氏側が「従備前懇望之儀、従京都被指下御上使、被成御下知候」[40]とも述べているように、この「芸備和平」は、毛利氏の軍事攻撃が迫る中で危機的状況を迎えつつあった浦上氏の、まさに存亡を懸けた外交工作が奏功した結果であったと捉えることができよう。

このように、備作地域の親大友方勢力を取りまく危機的状況は、浦上氏自らの尽力による備芸和睦実現によって解消されていった。大友氏の伊予出兵は、毛利氏による備作侵攻を抑止する程の軍事的効果を得ることができず、当該地域における政治的・軍事的情勢の好転に直結した訳でもなかったのであり、結果から見れば、僅かながらの政治的・軍事的示威行動に終始したと評価せざるを得ない。では、こうして備作地域での軍事的緊張が一時的ながらも緩和されていく中、残る伊予情勢、つまり能島村上氏を取りまく状況はどう推移していくのか、そしてそれに大友氏はどう対応していたのだろうか。

〈史料⑨〉

就武吉・通総（宋島）和談之儀、旧冬以使節申候之処、速純熟之由承候、尤肝要候、雖無申迄候、骨肉一致之首尾、向後聊無変化被申談、不入他之案様御才覚専要候、仍以ヶ条申旨候、能々有思惟、無腹蔵入魂可為祝着候、委細桂江庵相含候之趣、猶年寄共可申候、恐々謹言、

三月廿一日　　宗麟（大友）（花押）

村上掃部頭（武吉）殿

（『先哲』四―一四五八）

史料⑨によれば、大友氏が永禄末年より対立状態が続く来島・能島両村上氏の和睦斡旋を行っていることがわかる。[41] 従来、この史料は元亀三年と比定されており、[42] 大友氏は「旧冬」つまり元亀二年（一五七一）末、両村上氏に使節を派遣して和睦を斡旋し、両村上氏が速やかにそれを受諾したことによって、元亀三年三月時点では和睦が実現していたと理解されている。前述のように、確かにこの時期両村上氏は明確に軍事的対立状態にあるが、仮に元亀二年末頃より大友氏が和睦斡旋に奔走していたとすれば、例えばその渦中に発給された史料①や大友氏が筑後国衆に対して赤間関出陣を命じた史料③、そして和睦実現直後であるはずの史料⑥などに、こうした大友氏による和睦斡旋交渉の形跡が窺えて然るべきではなかろうか。また能島村上氏に対する毛利方勢力の軍事的圧迫は、和睦締結が実現したとされる元亀三年三月以降も継続している。以上の点から、従来の理解には違和感を感じざるを得ないのであるが、この大友氏による両村上氏の和睦斡旋時期を窺い知る上で、以下の史料は興味深い。

〈史料⑩〉

去冬至来島申遣候趣、近日従武吉被仰通候哉、両使下着珍重之至候、最前之首尾候之条、弥堅固相調候様御才覚干要候、然者備前口和睦ニ被成候哉、案中候、併両島於御入魂者、従爰元茂別而可馳走之条、可御心安候、猶桑左用口上候、恐々謹言、

十月十四日　（田原）親賢判

島中務少輔殿　御報

この史料は田原親賢から能島村上氏の重臣島氏に宛てられたものである。[11] まず本文書の年代比定だが、本文内に「備前口和睦ニ被成候」とあり、それが前述した備芸和睦と時期的にも符合することから、元亀三年であると考えて差し支えなかろう。これを前提として本史料の解釈を進めていくと、「去冬（＝元亀二年冬）」に親賢が来島村上氏へ申し遣わした内容に関して、最近になって能島村上氏より来島方へ連絡交渉が行われたことが示されている。前述のように、この間両村上氏は軍事的対立状態にあり、こうした相互交渉が途絶えていたとしても不思議ではないが、そのような両氏間の敵対関係がこの時期徐々に薄まりつつあったことを窺わせよう。親賢はこうした状況を歓迎しつつ、能島村上氏に対して「弥堅固相調候様御才覚肝要候」と何らかの案件成立に向けた調整が適切に行われるよう期待している。そして親賢は備芸和睦が実現したとの情報に触れた上で、「併両島於御入魂者、従爰元茂別而可馳走之条、可御心安候」と述べているのである。

このように親賢がその調整に奔走することを約し、実現を期待していた案件とは「両島於御入魂」、つまり能島・来島両村上氏間の関係改善であったと考えられよう。こうした理解が妥当であるとするならば、能島・来島両村上氏間の和睦は元亀四年（一五七三）だった可能性が想定できる。つまり元亀三年十月頃より田原親賢が和睦斡旋交渉に介在しながら、大友氏による能島・来島両村上氏間の関係改善が進められ、翌年三月までには和睦が合意されていたと考えられるのである。

また、こうした大友氏の積極的対応は、以前より求められていた能島村上氏に対する支援の一環でもあるとも捉えることができる。両村上氏間の和睦は史料⑩の文脈からも窺えたように、備芸和睦実現という中国情勢の推移と深く関わっていた。毛利氏が浦上氏との和睦締結を受諾し、備作情勢が次第に落ち着きを取り戻し始めていく中、大友氏には残る伊予情勢の安定化に向けて、何らかの対策を講じる必要に迫られていたものと思われる。このような状況下で、両村上氏間でも永禄末年以降継続してきた対立関係を解消しようと、次第に関係改善に向けた兆候が顕在化していく。それを受けて大友氏は両村上氏間の和

睦実現に奔走し、能島村上氏を取りまく軍事的緊張状態の緩和を目指したものと考えられよう。

備芸和睦と両村上氏の和睦によって、当該地域をめぐる政治的・軍事的情勢は、表面的には一時的な安定化を遂げることとなった。しかし、根本的な大友・毛利間の対立関係が継続している以上、そうした安定は長続きするはずはない。天正二年（一五七四）六月、大友氏は村上武吉に対して「加勢」が遅延していることについて申し開きをした上で、迅速かつ厳重な対応を約している（『先哲』四－一五二七）。そこには「此節其国永々属静謐候様」ともあるように、再び能島村上氏を取りまく情勢が緊迫化し始めていることが窺える。また備作方面では浦上氏配下宇喜多直家の離反を契機に、この時期毛利氏と浦上氏らとの軍事的緊張が一気に高まっていた。大友氏はこれら親大友方勢力に緊密な連携を求めると共に、「防長行無余儀存候砌、芸州之者至備中表取出之由候之条、此方出勢急速申付候」（『先哲』四－一五四八）と、元亀年間の際と同様に赤間関出兵を表明し、これらを強く支援する意志を伝えている。このように、大友氏は再びこれら親大友方勢力に対する支援を通じて、毛利氏との対立抗争を繰り広げていくことになるのである。

おわりに

本稿では元亀三年の大友氏による伊予出兵を取り上げ、その目的や背景といった実像を再検証した上で、それが当該期における大友氏の政治的・軍事的動向総体の中でどのような意味を有していたかについて検討を加えてきた。

大友氏は元亀三年初頭より赤間関表への軍事行動を企図し、毛利氏に対して軍事的圧力を加えようとしていく。それは永禄末年の対毛利氏戦争において緊密に連携し、北部九州からの毛利氏撤退に大きく貢献していた能島村上氏や浦上氏らを支援するという意味を有していた。毛利氏の九州再侵攻に備え、この時期早急な北部九州情勢の安定化と支配体制の整備を求められていた大友氏にとって、中四国の親大友方勢力との連携は、対毛利氏戦争を優位に進めたいという軍事戦略上は勿論、上級大名権力としての威信を賭けてでも行われるべきものだったのである。しかし麻生氏の離反や龍造寺・横岳紛争という北部九州

情勢の緊迫化によって、それは遅延を余儀なくされており、大友氏の積極的対応に期待を寄せていた親大友方勢力の動向にも大きな影響を及ぼしていた。特に度々反大友活動を繰り返し、元亀元年には軍事討滅する機会を逸していた龍造寺氏の動向は、大友氏に深刻な危機を招来させるに十分な事態だったと推測できよう。しかもこうした状況下で、毛利氏の本格的な軍事行動の表明に伴い、山陽情勢も一層緊迫化の度合いを強めつつあった。大友氏はこの時期、即応すべき重要課題を同時に複数抱える厳しい立場に追い込まれていたのである。

こうした大友・毛利戦争を基軸とし、北部九州から瀬戸内を中心とする中四国地域へと広範に展開する政治的・軍事的情勢推移の延長線上に、大友氏による伊予出兵策は浮上し、実行へと移されていくのである。その目的が、出兵によって浦上氏ら親大友方勢力に対する毛利氏の軍事行動を抑止し、危機的状況を迎えつつあったこれら勢力を支援することにあったのは間違いなかろう。従来、大友氏の伊予出兵は史料的に明確でないにもかかわらず、西園寺氏の一条氏攻撃という限定された動向との関連で位置付けられてきたが、本稿で検討してきたように、伊予出兵と西園寺氏動向との関連性は極めて薄いものと判断せざるを得ないのである。また、その軍事的行動が散発的かつ局所的なものと一見映りがちなことから、当該期における大友氏の政治的・軍事的動向の中で適切に位置づけられず、さしたる意味を持たないものと評価されてきた感は否めない。しかし、こうした出兵に関わる背景や攻撃目標とされた飯森が瀬戸内海西部海域における重要な交通拠点であったことを踏まえれば、厳しい状況判断を迫られた大友氏が現状で実行可能な最善策を模索し、より効果的かつ多大な軍事的成果をもたらすものとして、当初から明確な戦略的意図をもって伊予出兵を企図したと捉えるべきであろう。ただ、出兵した大友軍による飯森攻略は失敗し、期待したような成果を挙げ得ぬまま、伊予方面での軍事活動は不調裡に終始する。大友氏の目論見は水泡に帰すかに思われたが、足利義昭の斡旋による備芸和睦の実現によって、結果的に当該地域の軍事的緊張は鎮静化することとなった。そこで大友氏は残る能島村上氏に対する支援として、来島村上氏との関係改善を積極的に推し進めることで、能島村上氏を取りまく情勢の安定化に取り組んでいったものと考えられよう。

本稿で明らかにしてきたように、大友氏の個別地域における動向を検討する上では、その関係地域のみならず、全体的な大友氏の政治的・軍事的動向を踏まえた上でなされる必要があることは言うまでもない。本稿で検討し得なかった天正初期においても、前述のように中国情勢が再び緊迫化し、大友氏と当該地域の親大友方勢力との連携が活発化し始めている一方で、北部九州でも大友・龍造寺間の軍事的緊張がピークを迎え[44]、大友氏が龍造寺氏の「誅伐」を表明する緊迫した事態に至っている。具体的な検討は今後の課題とするが、元亀年間における状況と同様に、これらの動向が相互かつ緊密に影響し合っていることは間違いないものと推測される。こうした北部九州及び中四国地域双方における政治的・軍事的情勢の相互関連を十二分に意識しつつ、今後もより幅広い視野から当該期における大友氏の政治的・軍事的動向の更なる実態解明を行う必要性が求められていると言えよう。

註

(1) 外山幹夫『大名領国形成過程の研究―豊後大友氏の場合―』(雄山閣出版、一九八三年)第二編第一章第三節「戦国大名全盛期の動向―義鎮時代―」、『大分県史　中世篇Ⅲ』(一九八七年)第三章第一節「北九州の平定と支配体制の完成」など参照。

(2) 『愛媛県史　古代2・中世』(一九八四年)第四章第四節二「南予の戦雲」六七四頁。

(3) 大友氏による伊予出兵の契機を西園寺氏の一条氏攻撃にみる見解については、前註(2)『愛媛県史』の他、福川一徳「戦国期における伊予と豊後―水軍をめぐる諸問題―」(地方史研究協議会編『瀬戸内社会の形成と展開―海と生活』雄山閣出版、一九八三年)、同「豊後水軍についての一考察」(川添昭二編『九州中世史研究』三、文献出版、一九八四年)、橋本操六「佐伯惟教の豊後帰参」(『大分県地方史』一一五、一九八四年)、山内譲「河野通直(牛福丸)の時代(上)―戦国末期の伊予―」(『ソーシアル・リサーチ』一七、一九九一年)、朝倉慶景「土佐一条氏の伊予進攻について」(『伊予史談』二九五、一九九四年)、外園豊基「豊後対友勢の伊予乱取り―『清良記』の世界―」(同著『戦国期在地社会の研究』所収、校倉書房、二〇〇三年)などの諸論考の他、大分県内の自治体史では『佐

賀関町史』（一九七〇年）や『佐伯市史』（一九七四年）などに確認できる。また愛媛県内で近年改訂された『大洲市誌』（一九九六年）や『保内町誌』（一九九九年）、『宇和町誌』（二〇〇一年）にも、こうした従来よりの通説的見解が踏襲されている。

（4）大友氏の伊予出兵について触れている後世の編纂資料には、『大友家文書録』『大友興廃記』『与陽河野家譜』『陰徳太平記』などがある。前掲の先行研究においては、特に『大友家文書録』綱文（『大分県史料』三二巻三六三頁）や『大友興廃記』（『大分県郷土史料集成』上巻戦記編二三三頁）の記述が引用されるケースが多いが、その中にはこれらを無批判に典拠としているものも多い。特に『大友興廃記』及びその所収文書に関しては、既に『増補訂正編年大友史料』の編者田北学氏を始めとする先学諸兄によって注意勧告がなされているように、その取扱いについては極めて慎重な態度で臨む必要があろう。

（5）伊予出兵の実態に関する記述が『大分県史』内に確認できないということは、従来の大友氏研究がその意義を重要視してこなかったことを端的に示していよう。

（6）福川一徳「元亀―天正年間の大友・毛利氏の戦い」（『軍事史学』二六―四、一九九一年）。前註（2）で挙げたように福川氏も当初は従来の理解に依っていたが、同論文において「ともすれば従来、宗麟は娘婿一条兼定を支援するため、西園寺退治を行ったと解されてきたが、今後、別の観点から大友氏の宇和攻略を見る必要がありそうである」と、この時点で見解を修正されている。伊予出兵を大友・毛利関係のなかで捉える必要があると見通した福川氏の指摘は極めて重要であり、従うべき見解であろう。しかし論旨との関係から、同論文内で出兵の具体的様相やその目的などに関する詳細な叙述はなされておらず、そのことが結果的に、その後の研究史において福川氏の指摘が十分に踏襲されなかった要因となった可能性は否めない。こうした問題を払拭するためにも、福川氏の見解を踏まえた上で出兵の実態やその前後情勢を改めて検証すると共に、当該期大友氏の政治的・軍事的動向総体と関連させながら、伊予出兵の意味捉える必要があると考えられる。

（7）『大分県先哲叢書　大友宗麟　資料集』（大分県教育委員会、一九九四年）。以下、本文内では『先哲』と略記し、巻数と文書番号を併記する。

（8）当該期の能島村上氏を取りまく情勢については、福川一徳「届かなかった村上武吉宛の二通の書状」（『伊予史談』二六五、一九八七年）、同「『島家遺事』―村上水軍島氏について―」（『瀬戸内海地域史研究』二、一九八九年）、得能弘一「戦国期における海賊衆能島村上氏の動向―河野氏との関係を中心として―」（『政治経済史学』三八三、一九九八年）など参照。

（9）七月二十七日毛利輝元書状（『萩藩閥閲録』巻一四八「内藤六郎右衛門」六）。

（10）前註（2）福川一徳「戦国期における伊予と豊後―水軍をめぐる諸問題―」一二二頁。

（11）五月十七日大友宗麟書状（「松原家文書」＜広瀬町教育委員会編『出雲尼子史料集』下巻一四四六号、二〇〇三年、以下『尼子』と略記＞）。

（12）十月二十八日吉弘鑑理書状写（「無尽集」＜『尼子』一五一三＞）。

（13）大内輝弘の動向については、前註（1）『大分県史』第二章第三節三「大内輝弘の渡海」を参照。

（14）前註（11）。

（15）『陰徳太平記』巻六二。

（16）山内譲「海賊衆因島村上氏の港支配」（『四国中世史研究』五、一九九九年）二九頁。

（17）金谷匡人『海賊たちの中世』（『歴史文化ライブラリー』五六、吉川弘文館、一九九八年）一五二～三頁。

（18）「石見牧家文書―その翻刻と解説―」（岸田裕之・長谷川博史『岡山県地域の戦国時代史研究』＜『広島大学文学部紀要』五五―二、一九九五年＞）。以下、本文内では「牧」と略記し、同書内の文書番号を併記する。

（19）三月十一日牧尚春書状写（「『島家遺事』所印森藩島家文書」＜『尼子』一七四八＞）。

（20）神道家吉田兼右の日記『兼右卿記』によれば、安芸吉田から帰京途中の兼右は元亀三年三月十八日から備後国鞆に逗留しており、二十二日には同地を拠点とする因島村上亮康の子息と参会している。その際「父ハ至与州出陣云々」とあるように、当時因島村上氏は能島村上氏に対する軍事攻撃を行っている最中であったことが確認できる。

(21) 本稿で引用した「石見牧家文書」四九号と発給月日が近接する五、三三～三五、三九、四〇、四八、五一号などは、文書内容が共通していることから伊予出兵に関わる一連の史料であるとみられる。またこれら文書内で牧氏は大友氏に対し、元亀二年八月毛利氏の軍事攻撃によって出雲国内を逐われた尼子勝久がこの時期隠岐国に、重臣山中鹿介が但馬国に滞在していることを伝えている。勝久の隠岐滞在が元亀二年後半～元亀四年前半とされていることを踏まえても、これら一連の史料は元亀三年と比定するのが妥当であると思われる。この時期の勝久動向については、主に長谷川博史「毛利氏の山陰地域支配と因伯の諸階層」（二〇〇〇～二〇〇二年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告集「戦国期大名毛利氏の地域支配に関する研究」、二〇〇三年）を参照。

(22) 閏正月二十一日小早川隆景書状（『萩藩閥閲録』巻五三〈「楢崎与兵衛」九〉）。

(23) 六月二十一日吉川元春書状（『萩藩閥閲録』巻一二三〈「野村作兵衛」一六〉）。

(24) 豊後国内の水軍衆については、前註（3）福川一徳「豊後水軍についての一考察」が特に詳細である。

(25) 前註（3）福川論文及び橋本論文を参照。

(26) 前註（2）『愛媛県史』。当該期の宇都宮氏動向については『愛媛県史』の他、前註（3）『大洲市史　増補改訂上』第二編第二章第二節「戦国時代の大津（洲）」（一九九六年）などを参照。

(27) 元亀年間の河野氏内部情勢については、主に得能弘一「戦国期における海賊衆能島村上氏の動向―河野氏との関係を中心として―」（『政治経済史学』三八三、一九九八年）を参照。

(28) 「伊勢参宮海陸之記」（『愛媛県史　資料編文学』所収、一九八二年）。

(29) 前註（3）『保内町誌』第二編第一章第三節三「磯崎城」一五九頁。摂津氏に関しては、『八幡浜市誌　市制五十周年記念版』（一九八七年）第二編第二章第四節「戦国時代（一四六七年～一五七六年）」などを参照。

(30) 前註（2）『愛媛県史』を参照。

(31) 以下、元亀年間の北部九州情勢については、前註（1）『大分県史』参照。

(32) この今山合戦について、一般的には龍造寺氏が勝利し、その後急速な領国形成へとつながった画期になったと評価される。しかし堀本一繁氏は「龍造寺氏の戦国大名化と大友氏肥前支配の消長」(『日本歴史』五九八、一九九八年)において、今山で討たれたのは大友軍本隊ではなく一部隊であり、龍造寺氏の局地的勝利に過ぎないとする。また戦後処理の過程を示す史料からは、龍造寺氏が降伏の意思表明を行い、それを受けた大友氏がこれを赦免する形で和睦が成立していることなどを理由に、「大局的に見れば、元亀元年の合戦が大友氏の勝利に帰したことは歴然」と評価し、後世の編纂記録に依拠した先行研究を厳しく批判している。しかし毛利氏の九州撤退に伴って北部九州情勢の安定化に専念できる状況にあった大友氏は、宗麟自ら出陣したように龍造寺氏の軍事攻略を強く推し進めていたにもかかわらず、筑後高良山に駐留する大友軍本隊は今山合戦後も龍造寺氏を攻撃することなく、膠着状態のまま和睦合意へと推移していく。こうした情勢推移を整合的に理解しようとする上で、今山合戦を局地的勝利に過ぎないとする堀本氏の理解には違和感を感じざるを得ない。戦後処理のあり方や龍造寺氏の処遇に関しても、それはむしろ堀本氏も指摘しているように、当該期における両氏の政治的関係や政治的立場の差違が、あくまで当該地域の情勢安定化に向けた和睦交渉の手続き上顕在化したのであり、実際の戦況や交渉の場におけるイニシアチブの所在をどこまで正確に反映しているかについては、より慎重に検証される必要があるのではなかろうか。むろん今山合戦を「過大評価」しようとする意図はないが、それが大友氏動向や当該地域情勢に及ぼした影響の大きさもまた見逃すことができないことから、本稿では従来よりの一般的理解に従っておきたい。

(33) 以下、元亀三年における龍造寺・横岳紛争の経緯と大友氏側の対応については、前註(32)堀本論文を参照。

(34) 以下、横岳氏については、『西国武士団関係資料集二一　横岳文書1』(芥川龍男・福川一徳編校訂、文献出版、一九九六年)「解説」を参照。

(35) 本稿で明らかにしたように、大友氏は元亀三年六月の時点で、中四国の親大友方勢力支援として赤間関と伊予への軍事行動を表明していたが、同じ頃大友氏は宇佐郡衆に対し、六月六日に豊前方面へと出陣する田原親賢と連携するよう命じている(『先哲』四―一四六八)。親賢はこの時期、恐らく横岳氏支援に従事せざるを得ない筑後国衆を除外した形で、再び赤間関表での軍事行動の準備を進めて

いたものと思われる。しかし、この時も実際に出兵が行われ、何らかの軍事的成果を挙げたという形跡は確認できない。親賢は当該期の大友氏による赤間関攻撃の中核者として重要な役割を担うも、麻生氏や龍造寺氏動向に伴う北部九州情勢の変化に大いに翻弄され、当初の目的を達し得なかったものとみられる。

(36) 七月二十八日小早川隆景書状写（『萩藩閥閲録』巻一一七〈「久芳五郎右衛門」三六〉）。

(37) 元亀三年十月二十九日吉川元春・小早川隆景連署起請文写（『萩藩閥閲録』巻二五〈「清水宮内」一七〉）。

(38) 閏正月十三日足利義昭御内書写（『萩藩閥閲録』巻二一〈「柳沢靱負」三〉）。

(39) 六月二十八日足利義昭御内書写（『萩藩閥閲録』巻二一〈「柳沢靱負」一〉）。

(40) 九月十三日小早川隆景書状写（『萩藩閥閲録』巻一一七〈「久芳五郎右衛門」三五〉）。

(41) 宗麟は史料⑨の同日、来島村上氏に対しても同内容の書状を送っている（『先哲』四―一四五九）。

(42) 具体的根拠まで挙げた上で本史料の年代比定を行ったのは、管見の限りでは長山源雄氏だけだと思われる（「大友氏と河野氏及び伊予海賊との関係について」〈『伊予史談』一四九号、一九五八年〉）。来島村上氏が「通総」という実名を用いた時期と、本史料に据えられた宗麟の花押編年を基に、長山氏は堅実な年代比定を行っており、こうした同氏の見解がその後の個別研究や各自治体史に踏襲され、通説化していったものとみられる。しかし当時長山氏が元亀三年八月二日以降見られないとした本史料の宗麟花押は、現在では天正三年正月三十日が使用下限であるとされている（『先哲』四巻凡例）。このように、本史料の年代比定については、改めて再検討すべき必要性があると考えられる。

(43) 十月十四日田原親賢書状写（「島文書」〈『愛媛県史　資料編古代・中世』二〇九六〉）。

(44) 前註（32）堀本論文。